



TITLE:

清末洋務派の運動

AUTHOR(S):

小野川, 秀美

CITATION:

小野川, 秀美. 清末洋務派の運動. 東洋史研究 1950, 10(6): 429-466

ISSUE DATE:

1950-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145872>

RIGHT:

東洋史研究

通卷第十卷第六號 昭和廿五年二月發行

清末洋務派の運動

小野川秀美

洋務論は所謂西學を媒介とする一種の改革論である。その點に於て、洋務論は變法論の名稱の下に包轄されて差支へない。ただ變法論に對して洋務論と云ふ場合には、前者を後者の發展形態として、その間に區別を設けて然るべきである。變法論が成法を變じて、制度の根本的な改革を目指してゐるのに對し、洋務論は成法の根本には餘り觸れることなくして、新に洋務の一格を之に附加しようとするからである。兩者の相違を特徴的に云ふならば、洋務論の主眼は技藝であり、變法論の眼目は制度である。洋務論に於ても變法と云ふ言葉が用ひられるけれども、それは主に技藝に關するもので、制度の根本に關するものではない。兩者は何れも西學を改革の媒介とすることに變りないにしても、西學に對する認識の仕方と受容の仕方を異にしてゐる。

阿片戰爭（一八四〇）以來、殊に太平天國の亂（一八五〇—六四）と庚申の役（一八六〇）を契機として、西洋の武力的な優越が一部識者の間に痛感された。この武力の點に於ける西洋優越の意識が、中國自強の欲求と結び付く所に、洋務論と洋務運動を成立せしめる地盤がある。勿論中國自強のために、成法の線に沿ひ、清朝傳統の枠内に

於ける改良論も提出されてゐる。之が大多數の讀書人によつて支持される正統的な見解であつた。然しながら正統的な成法論に對して、異端的な洋務論と洋務運動が漸を逐ふてその比重を加へ、かくて新なる變法論を呼び起す所に、その歴史的な價值を認めなければならぬ。

洋務運動は曾國藩・李鴻章・左宗棠の如き有力な督撫に端を發し、李鴻章を中心として推進された。後には張之洞もその重要な荷擔者となつてゐる。所謂洋務は歸する所技藝の問題であつて、その内に種々の要素を含んではゐるけれども、その核心をなすものは軍務殊に海防であると云つて差支へない。西洋の長技を「船堅礮利」または「堅甲利兵」に求め、之と關聯する一連の諸務を併せ採り入れることによつて、軍備の充實を圖らうとすることは、洋務派の運動に共通する傾向である。云ひ換へるならば、洋務期に於ける西學は、軍務中心であつた。かかる種類の洋務の止むを得ないことが次第に爲政者の認める所となつて、洋務運動がその上昇期を辿るのは、光緒十年代（一八八四—一九三）のことである。然るに光緒十年代の前半期に於て、既に洋務に對する新なる批判が有力化しようとしてゐる。それは一面では、西學の根底に軍務以上のものがあると云ふ反省に由來するものである。軍務以上のものとは、即ち政治の在り方に外ならない。ここに軍務よりも内治を重視する傾向が起るべきであり、弊政の改革・吏治の刷新が軍務の先決問題となつてくる。それは洋務論から變法論への移行である。そしてかかる傾向が日清戰役（一八九四—五）を重要な轉機として、更に制度の根本的な改革を唱へる康有爲の變法論、及び胡禮垣の新政論にまで發展するのである。吏治の刷新は成法論に於ても主要項目であつた。然るにここに於ては、制度の範を西學に採ると共に、成法を越えて、古典にその根據を求めようとしてゐる。而も西學は變法を媒介として、古典即ち孔孟の教と不可分離に結ばれるのであつて、西學の採用が著しく積極性を帯びるのである。この點にまた變法論が洋務論に比して、成法論との間に更に激しい對立を促す根本の原因がある。

洋務論の變法論に對する關係を以上の如く要約し得るとするならば、所謂洋務派の運動そのものは、具體的に如何なる内容を持ち、如何なる變法論への移行の過程を採つてゐるか。その點を少しばかり明かして見たいと思ふ。

一

洋務に對する關心は、その徴候を阿片戰爭の頃にまで溯り得るかも知れない。然しながら洋務論または洋務運動と云ふ形ものが現はれるのは、咸豐の末・同治の初以來のことである。その直接の契機となつてゐるものが、太平天國の亂と庚申の役、殊に前者であり、その中心となるものが上海並に香港であつた。上海は香港と共に當時にあつて別天地をなしてゐた。「香港に居るものは率ね財の多きを誇り、禮文を疎じ、道德を笑ふ」とは、王韜の言葉である。上海もまた香港と異なる所がない。上海に通事と云ふ一階級が成立しつゝあることは、同治の初年既に馮桂芬が指摘してゐる。「上海の通事は人數が甚だ多く、獲利も甚だ厚い。遂に士農工商の外に別に一業をなす。廣州寧波の人が多い」と**かかる通事の如く、「市門に倚り、坐して厚貲を擁するもの」があると共に、世族名門にしてその間に淪落するものも多かつた***王韜の同治十年（一八七二）の作瀛壖雜誌****によれば、上海は殊に風俗が日に華靡となり、衣服に上下の別なく、また僕隸は士類を凌轢して、尊卑の等が既に紊れてをり、久居すべきではない、と記されてゐる。恐らく太平天國の亂と上海の急激な發展を契機として、この地に於ける社會の階層間には大いなる變動が起りつゝあつたと思はれる。上海に於ては、從來の社會秩序が殆ど崩壞の過程にあつたと云つて差支へない。且つ上海の繁榮は早くから租界に依存してをり、租界は太平天國の亂に著しく強化された。「外人蔑視と云つたことは、上海に於ては最早や不可能のことであつたのである」*****同様のことは香港について更に云ひ得るに違ひない。かかる傳統を無視して發展する上海並に香港に、洋務運動が最初の根を

おろすのであつて、王韜は上海の洋務をば、「前より云ふならば地之をなし、後より云ふならば人之をなす」と述べてゐる（*瀛海雜志*）。ただ異なる所は、上海の洋務論が啓蒙性と同時に政治力の背景をもつのに對して、香港の洋務論は政治力をもたない點である。それだけにより積極性を帯びてゐる。

* 皇朝蓄艾文編卷六一、王韜「香港略論」。

* * 校邠廬抗議卷下「上海設立同文館議」。校邠廬抗議には咸豐十一年冬十月の自序があるけれども、「上海設立同文館議」は恐らく同治元年の作であること、本文の内容に徴して疑ない。後にこの書の内容に採録されたものである。

* * * 王韜「*張園著述總目*」海軍治游錄卷七の條（春秋朔閏至日攷附）。

* * * * 小方壺齋輿地叢鈔第九帙第一冊所收。

* * * * Ernest O. Hauser, Shanghai; City for sale, p. 63 2 Medhurst の言葉として引用されてゐる。

既に述べた如く、洋務を具體化せしめる直接の契機となつてゐるものは、太平天國の亂と庚申の役である。南都を天京とする太平軍は、咸豐十一年（一八六一）會國藩が安慶を回復してより、作戰の主力を江浙に向けた。李鴻章と左宗棠がそれぞれ江蘇巡撫及び浙江巡撫に任ぜられたのは、そのためである。そして江蘇に於て、李鴻章は外人編成の常勝軍の活躍を眼の當りに見、浙江に於て、左宗棠は清佛混成の花絲頭軍の活動に接した。西洋の所謂堅甲利兵の威力を目近かに體驗するのであつて、彼等の洋務に對する關心は、ここに端を發するのである。左宗棠は後に福州馬尾に船政廠を開いたとき、プロスペル・ジケル (Prosper Giquel 日意格) 及びポール・デグベリター (Paul d'Aiguebelle 德克碑) を招聘してゐる。何れも左宗棠の太平軍討伐に當り、清佛混成軍を編成して、之に協力してゐることが想起されるのである。

太平天國の亂が會國藩・李鴻章・左宗棠をして洋務に關心せしめる契機となつてゐるとするならば、庚申の役は直接に北京を動搖せしめる深刻さをもつてゐる。庚申の役は、周知の如く、天津條約（一八五八）の批准・北京

條約の締結（一八六〇）を以て局を結んだ。華夷思想を廻つての阿片戦争以前の紛争は、ここに一應の結末を告げたと云つて差支へない。勿論皇帝謁見の問題はなほ後年にまで残され、華夷意識は嘗つてない動搖を受けたにしても、打破されはしなかつた。然しながら公文書に於て外人を夷と稱し得なくなり、外國公使の北京駐劄が認められ、且つ條約を恩惠的なものとする從來の考へ方は、最早や通用しなくなつたのである。恰も庚申の役の途上に於て、熱河蒙塵中の咸豐帝が病歿し、それを契機として表面化された怡親王載垣・鄭親王端華及び肅順等の陰謀が潰滅することによつて、極端な守舊派が除かれた。ここに「北京に於ける最も開明な政治家達の指導者」*と外人が評する恭親王を中心として、列國に對し協調の方針が採られるのである。

* Philip W. Sergeant, *The Great Empress Dowager of China*, p. 40

かかる事情を背景として、所謂洋務が北京及び上海・福州等にほゞ時を同じくして開始されることになつてゐる。北京に於ては、天津條約の規定により、咸豐十一年（一八六一）英佛米の三公使館が設置され、列國との外交事務を扱ふべき總理各國事務衙門も設立された。之まで朝貢國なみに理藩院の管轄下にあつた列國との外交事務が、ここに始めて獨立の官廳をもつのである。それと共に、「各國の情形に通じ」、「人の欺蒙を受けない」ために、その語言文字を教へようとする同文館が、同治元年（一八六二）總理衙門に附設され、更に同六年（一八六七）同文館内に算學館が附設された。「西人製器の法は度數によつて生ずるのであり」、輪船機器製造の根底には天文算學があると云ふのが*算學館附設の主旨であつた。

* 皇朝經世文三編卷一、恭親王「奏請開設同文館疏」。

上海に於ては、同治二年（一八六三）外國語言文字學館（一名廣方言館）が設立され、同四年（一八六五）江南機器製造總局が開辦された。上海にある外人經營の鐵廠・機器を買収し、外人技師を監督として、洋槍洋砲等の製

造に着手されたのである。李鴻章の上奏によれば、語言文字學館は「洋務の大事をなす」「無頼の通事」に代るべき人材を、「讀書明理の人」から養成すると共に、「西文に精熟することによつて、「一切の輪船火器等の巧技に漸を逐うて通曉すること」を目的とするものであり、機器製造局は「西人の長技を取つて中國の長技となし」、「今日禦侮の資・自強の本となす」ことを意圖したものであつた。側ら李鴻章は宣教師ジョン・フライヤー (John Fryer 傅蘭雅) を招聘して、洋書を漢譯せしめてゐる。所謂製造局の譯書として知られるものが之であつて、光緒元年 (一八七五) の頃には「四十餘種を譯出し、二十餘種を刊行した」と云ふ。それは算學・化學・汽機・火藥・砲法等の編を主とし、行船・防海・練軍・採煤・開礦等の類に及んでゐる。また同じく同治四年 (一八六五) 南京機器局が南京に設けられ、同六年 (一八六七) 上海の機器製造局に於て、輪船の建造が開始された。

* 李肅毅伯奏議卷一、「請設外國語言文字學館摺」。

** 同書卷二、「置辦外國鐵廠機器摺」。

*** 光緒政要卷一、光緒元年十月「直隸總督李鴻章兩江總督沈葆楨奏上海機器局報銷摺」。

上海及び南京に於けるこれ等の洋務は、江蘇巡撫李鴻章が兩江總督會國藩の支持を得て施行したものが多く、薛福成は會國藩の洋務の講求を製器・學技・操兵の三點に歸してゐる。之は以上の諸項に同治十年 (一八七二) アメリカに留學生派遣の一項を加へて、之を要約したものであつて、また同治年間に於ける李鴻章の洋務の要綱を示すものに外ならない。蓋し會國藩の洋務は、李鴻章を俟つて推行されたものが多いからである。これ等と並行して、同治五年 (一八六六) 閩浙總督左宗棠によつて福州馬尾に船政廠が開かれ、同六年 (一八六七) 直隸總督崇厚によつて天津にも機器局が設けられたやうである。かくて北京の外務と並び、機器・船政及び學校の如き洋務が、會國藩・李鴻章・左宗棠の如き地方の有力な督撫によつて施行されることとなつた。同治の前期に於て、洋務は

南北共にその萌芽を見せるの、である。

* 庸庵文編卷一、「代李伯相擬陳督臣忠勳事實疏」。

ただ注意しなければならぬ點は、李鴻章等の洋務が「禦侮の資・自強の本」となさうと云ふ内的な自發性をもつのに對して、北京の洋務は外的な強制に出づる所が遙かに多いことである。協調は強ひられた協調であつて、よりの戻る可能性を多分にもつてゐる。同治六年（一八六七）同文館に算學館を附設する際には、天文算學は儒者の當に知るべき所で、機巧となすべきではなく、西法を借りて中法を印證するに過ぎない、と云ふ上諭が發せられた。「西法を借りて中法を印證する」と云ふのは、「西術の借根（代數學）は實に中術の天元に基くもので、西人の内にも目して東來の法とするものがある」、と算學館の設置を合理付けようとした恭親王の上疏と* 同一の思想である。然るにこのとき、科舉正途の士は讀書學道を本分とするもので天文算學の如き機巧を習はしむべきでない、と云ふ御史張盛藻の上奏、立國の道は禮義を尙び權謀を尙はず、根本の圖は人心にあつて技藝にあるのではない、と云ふ大學士倭仁の上奏、及び同文館奏設の各部大臣を彈劾する小官楊廷熙の代奏が現はれてゐる。* 同治十一年（一八七二）には、輪船の製造は靡費甚だ重く、暫く停止すべきであると云ふ大學士宋晋の上奏に對して、李鴻章の辨駁がなされたこともあつた。***

* 皇朝經世文三編卷一、「奏請開設同文館疏」。

** 矢野博士「近代支那史」五一七—八頁

*** 李肅毅伯奏議卷四、同治十一年五月十五日「籌議製造輪船未可裁撤摺」。

次いで同治十三年（一八七四）李鴻章は、考試學令にやや變通を加へて、別に洋務進取の一格を開くこと、そのために海防の要ある各省に洋學局を設けて、時務に通曉する高官を主任とし、格致・測算・輿圖・火輪・機器・

兵法・砲法・化學・電氣學の諸部門に分つべきことを覆奏して、殆ど何等の反響をも起してゐない。之は科學にやや變通を加へようとするもので、その根本を變へようとするのでは勿論なかつた。「小楷試帖が甚だ虚飾を蹈み、甚だ人材作養の道でない」ことを認めながら、而も「科目にははかに變することは出来ないし、時文にははかに廢することは出来ない」と考へられてゐる。之までの八股取士の法をそのままにして、別に洋務の一格を開かうとしたに過ぎないのである。かかる穩健な取士變通の建議さへ、李鴻章の重望を以てしても、要路は勿論、官場の注目を惹くには至らなかつた。中國の政治と文化の本質に連る科擧に、洋務の一格を附加するが如きは、當時の北京に於て恐らくは度外のことであつたらうと思はれる。光緒政要によれば、「北方風氣の先を開き、中國兵船の本を立」てたのは、光緒七年（一八八二）天津水師學堂の落成に始ると云ふ。同治年間及び光緒の初の北京の官場は同治初年の状態を一步も出でず、寧ろ後退の氣配をすら感ぜられる。北京に於て洋務は行はれたにしても、洋務論または洋務運動と云ふが如きものの現はれる可能性は、當時殆どなかつたのである。洋務論または洋務運動は、上海に端を發する李鴻章中心の洋務派の人々、及び植民地香港に起るべき性質のものであつた。

* 李文忠公奏議卷二四、同治十三年十一月初二日「籌議海防摺、附議各口清單」。

** 卷七、光緒七年七月「天津設立水師學堂落成」。

二

同治年間に於ける李鴻章の洋務に重要な示唆を與へたものは、馮桂芬であらうと思はれる。馮桂芬は江蘇吳縣の處士で、太平天國の亂の時に、上海の紳董から汽船を會國藩の安慶の本營に送つて、援兵を請ふたとき、その乞援の書を書いたので、大いに國藩に推稱されたと云はれる。同治元年（一八六二）李鴻章が江蘇に進駐したのは一面ではこの乞援の放果であらう。恰もこの前年（一八六二）馮桂芬の改革論が校邨廬抗議と云ふ一書にまとめら

れてゐる。それは要約するならば、復古に内政改革の原理を求めると共に、西學に富強の術を認めようとするものであつた。復古と西學は、後の變法論に於ける主要題目である。ただ變法論では、復古則西學と云ふ、兩者が不可分離の關係を採つてくるのに對し、馮桂芬では、兩者が互に並立するものとなつてゐる。復古が「三代聖人の法に畔かないことを以て宗旨をする」のに對して、** 西學の採用は「後王に法る」ことに、その根據を置くのである。そして後王に法るとは、「今日に於てはまた諸國に鑒みると云ふことに外ならなか」つた***

* 内藤博士「清朝衰亡論」六六頁。

** 校邠廬抗議自序。

*** 同書卷下、「采西學議」。

ここに「反求」と「夷に待つあるもの」と云ふ二方式が考案されてくる。馮桂芬によれば、中國が「夷に待つあるものは、獨り船堅礮利の一事のみ」である。中國は外國に及ばない點の所在を知つて、自強を圖らなければならぬ。人に棄材なく、地に遺利なく、君民が隔絶せず、名實が必ず符合する、と云ふこの四者は、西洋に及ばない。然しながらその解決の道は「反求」にあり、ただ皇上が紀綱を振刷しさへすれば、容易に轉移することが出来る」と考へられた。道は反つて之を已に求めることにより、解決さるべきである。従つてこの四者は、外國に待つなきものであつた。軍旅のことに至つては、船堅礮利並に有進無退は外國に及ばないけれども、人材の健壯は必ずしも外國に及ばない譯でない。且つ中國の兵にも有進無退が可能である。従つて外國に待つあるものは、「獨り船堅礮利の一事」に歸するのであつて* そのために西學の採用が肝要となるのである。

* 同書卷下、「製洋器議」。

それでは如何にして西學を採用すべきであらうか。その手段として馮桂芬の擧げるものが、翻譯公所と船礮局

の設立であつた。廣東・上海に翻譯公所を設け、近郡の十五歳以下の文童を選んで、諸國の語言文字と共に經史等の學を課し、兼ねて算學を習はしめようとするのである。算學を習はしめるのは、「一切の西學は皆算學より出で」、「西學を採らうとすれば、自ら算を學ばねばならぬ」と云ふ見識に由來してゐる。意圖する所は、諸國の語言文字と算學の學習をば、所謂西學關係の書物を翻譯する階梯たらしめようとするにある。西學の基礎に算學を置く馮桂芬の考へ方は、以後日清戰爭の頃に至るまで、西學に志すものの一般的な通念となつてゐる。また船礮局は、通商の各港に船礮局の一科を設けて、優秀なものに舉人・進士を賞給し、かくて聰明智巧の士の半を分つて、製器尙象の途に従事せしめようとするものであつた。^{*}翻譯公所と船礮局は、「船堅礮利」のための前提として、先づ洋書の翻譯と人才の育成に注目したものに外ならない。

^{*} 同書卷下、「采西學議」。

^{**} 同書卷下、「製洋器議」。

馮桂芬は後に李鴻章の帷幕の一人となつてゐる。李鴻章の洋務に關する上奏または施行に、馮桂芬の見解が反映するのは、當然のことと思はれる。例へば、同治二年（一八六三）李鴻章の「請設外國語言文字學館摺」は、馮桂芬の「上海設立同文館議」（校邠廬抗議卷下）に殆どそのまま據つてをり、恐らくは後者が前者の草案である。それはまた翻譯公所の構想の具體化されたものと云つて差支へない。李鴻章がジョン・フライヤーを招聘して、所謂製造局の譯書を刊行せしめたのも、馮桂芬の所論に示唆を受ける所があつたからとも想像出来る。また別に洋務進取の一格を開くために、海防の要ある各省に洋學局を設けよ、と云ふ同治十三年（一八七四）李鴻章の覆奏はその由來する所、馮桂芬の船礮局にあると思はれる。洋學局と船礮局は、名を異にして實を同じくするものである。

馮桂芬の改革論は、既に述べた如く、復古と西學の兩面をもつてゐる。内政の改革は復古に依り、海防の充實は西學に俟つと云ふのが、その骨子であつた。それは「中國の倫常名教を以て原本とし、輔するに諸國富強の術を以てしようとする」ものに外ならない*ただ復古は遠く三代の古にその理想を求めるのであつて、結局に於て清朝傳統の成法を否定するものである。そこに馮桂芬の復古説が洋務派の人々に敬遠され、却つて變法論の時期に新なる價值を見直される所以がある。然るにその西學説は、李鴻章を俟つて上奏または施行に移されるのであつて、その洋務派に對する影響は、輕々に之を看過することは出来ない。

* 同書卷下、「采西學議」。

李鴻章を中心とする洋務派の人々の間に於て、馮桂芬の後に注目さるべきものは、薛福成の見解であらうと思はれる。その代表的な作の「應詔陳言疏」である*之は光緒元年（一八七五）新帝の求言の詔に應じた薛福成の上疏であつて、治平六策及び海防密議十條の二大項目に分れてゐる。前者は「養賢才」・「肅吏治」・「恤民隱」・「籌漕運」・「練軍實」・「裕財用」の六策から成り、後者は「擇交宜審也」・「儲才宜豫也」・「製器宜精也」・「造船宜講也」・「商情宜恤也」・「茶政宜理也」・「開礦宜籌也」・「水師宜練也」・「鐵甲船宜購也」・「條約諸書宜頒發州縣也」の十條である。前者は要するに「用人行政の諸事宜」を説いたもので、それには「成憲を遵循する以外にないけれども」、必ず修明の術・補救の法・變通の道がなければならぬ、と云ふ見地に立つてゐる。「用人行政の諸事宜」は、薛福成によれば、また「自治の法」である。「外侮を禦がうとするには、先づ自強を圖り、自強を圖らうとするには、先づ自治を求めねばならない」。治平六策は「中國自治の法に於てその要領を略陳したもの」であり、之に對して、海防密議十條は「自強の道に於てやや裨益する所ありたい」、と云ふ抱負に出てゐる。「自治」と「自強」を區別して、互に先後の關係に置くのである。

* 庸庵文編卷一。

この「自治」と「自強」を區別して、互に先後の關係に置かうとする薛福成の見解は、恐らくは「反求」と夷に待つあるもの一とを區別する馮桂芬の方式に、由來してゐると思はれる。異る所は、馮桂芬が復古に反求の道を求めるのに對して、薛福成はあくまで「成憲」の枠内に於て、變通の道を見出さうとする點である。従つて治平六策には、馮桂芬の校邠廬抗議に負ふ所もあるけども、結局に於て、成法の線に沿ふ從來の除弊論の範圍を出てゐない。殊に同治元年（一八六二）蔣琦齡の應詔上中興十二策疏*の系統を引くもののやうである。薛福成に於て重視さるべきものは、治平六策ではなくて、海防密議十條であらう。海防密議十條は洋務密議十條と言葉を代へて、少しも差支へない。それは水師・艦船・機器のみならず、外交・商情・茶政・開礦及び洋務に習熟する人材の育成の諸項を包含してをり、そしてそれ等を總轄するに海防密議を以てしてゐる。そこに洋務の根幹をなすものが海防であると云ふ、當時の洋務派の見解の、端的な表明を認めることが出来る。

* 皇朝道咸同光奏議卷一。十二策とは「端政本」・「除粉飾」・「任賢能」・「開言路」・「卹民隱」・「整吏治」・「籌軍實」・「詰戎行」・「慎名器」・「卹旗僕」・「挽頹風」・「崇正學」の諸項である。「校邠廬抗議」に負ふと云ふのは、「養賢才」の條に於て京秩を重んじ、幕職を設けよと論じ、「肅吏治」の條に於て、捐例を停め養廉を加へよと云ふが如きであつて、幕職の一項に於て殊に然りとする。然しながら馮桂芬に於てより重要なものは、鄉職・宗法・職田の復活・儒官の尊重・科學の改革・取士の廣開の如き事項であるが、これ等は何れも看過されてゐる。

馮桂芬に於ける西學の眼目は、「船堅礮利」の前提となるべき翻譯公所と船礮局の設立、即ち洋書の翻譯と洋務に關する人材の育成であつた。然るに薛福成に於ては、「船堅礮利」そのもの、及びそれを支へる裕財の法が、併せて洋務の對象となつてゐる。製器造船は更に軍艦の購入をも含むと共に、海防のための財源をば、新に洋務の一環として採り上げるのである。云ひ換へるならば、それは強兵と富國の觀點に立つて、海防の充實を圖らう

とするものに外ならない。ただ注意される點は、富國が強兵と並び立つのではなくして、あくまで強兵に對して從屬の關係を採ることである。富國の策として擧げられるものは、茶政・開礦及び郵商である。樹茶・開礦は馮桂芬が裕國の補助的な手段として、「反求」の内に加へたものであるが、薛福成は茶政・開礦をば「自強」の二項目に數へてゐる。國を裕かにするには農桑の常説に則り、樹茶・開礦を補助とする以外にないと云ふのが、馮桂芬の見解であつた* 薛福成は絲と並び中國出口の大宗をなす茶の税額を加重することによつて、「製器造船の費・練兵籌餉の源を得よう」とし、「また外國開挖の器を用ひて、中國永遠の利を興す」こと、即ち開礦をば「籌餉の一助」たらしめようとしてゐる。同様のことは郵商についても云ふことが出来る。華商を調護して、官吏の需索と關津の稽留を禁じ、貿易を盛ならしめて、然る後にその常税を權することが説かれるのであるが、それは「専ら兵船を養ふ」ためであつた。樹茶・開礦を裕國の補助的な手段とする馮桂芬の域を越えて、茶政・開礦・郵商が何れも海防の直接的な財源と見做されてゐる。強兵のための富國と云ふ考へ方が、海防密議に於て極めて鮮明に現はれるのである。

* 校勘疏抗議卷上、「籌國用議」。

李鴻章を中心とする洋務派の見解を代表するものが、馮桂芬と薛福成、殊に薛福成であるとするならば、香港に於ける知識人の意向を表明するものは、王韜であらうと思はれる。王韜は同治元年（一八六二）太平軍に内通の嫌疑を受けて、上海から香港に逃れ、同六年（一八六七）ジェームス・レッグ（James Legge 理雅谷）の漢籍の英譯を助けるために、招かれてイギリスに渡つた。次いで同九年（一八七〇）香港に歸へり、同十三年（一八七四）以後香港に循環日報を發行してゐる。中國ジャーナリズムの先驅者と云はれる人である。ここに於ては、光緒元年（一八七五）を前後する三四年間の作と推定さるべきものについて、その要旨を述べてをきたい。それによつて、

李鴻章を中心とする洋務派との見解の異同が、自ら明かとなるであらう。

光緒元年前後の諸篇に於て、王韜の所論には時に可成りの差異を感ぜられるけれども、所謂「變」の強調は前後一貫してゐる。その根底にあるものは、「四千年來未有の創局に際會してゐる現在、一變して自强を圖らねばならぬ」と云ふ信念である。「一變以外に道はなく」、「善變が天の心」であつた* 勿論王韜の所謂「一變の道は、西洋の能くする所を師とし、その恃む所を奪ふ」ことである。馮桂芬は西學の當面の目標を「船堅礮利」の前提となるべきもの、洋書の翻譯と人材の育成に置き、薛福成は「製器造船」と共に裕財の法に留意して、洋務を内容的に擴大せしめた、そして何れも「反求」と「夷に待つあるもの」、「自治」と「自强」を區別してゐる。王韜に於ても、武備の講求・海防の整頓・守禦の慎固・營制の改易・兵士の習練・器械の精製が「實に當務の急」であり、「文武の兩科は變通して、悉く舊制を改むべきで」あつた。「その次は財用を裕かにする」ことであつて、鑛を開いて銀を鑄し、機器を尙んで紡織を行ひ、通商貿易には輪船を用ひ、且つ火輪鐵路・電氣通標もまた自主的に之を行ふべきものとされてゐる。意圖する所は、中國をば「萬國公法の中に伍し得る」國家たらしめることであり、そのための「兵強國富・勢盛力敵」に外ならない。時勢は「固より閉關自大の時ではない」からである**

* 皇朝藝文編卷一、王韜「答強弱論」。

** 同書同卷、「同「變法自强」上」。

然しながら王韜によつて列舉される強兵の策及び富國の法は、薛福成の範圍をやや擴大せしめたものであつて、特別に相違あるものではない。問題は更に一轉して、「變法自强が何よりも肝要であり」、「今日當に變すべきもの」をば、取士・練兵・學校・律例の四項目に求めてゐることである* 取士に於ては、時文を廢して、鄉舉里選と考試制度の並用を唱へ、考試の科目は經學・史學・掌故の學・詞章の學、及び輿圖・格致・天算・律例・時事辯論・

直言極諫の十科に區分されてゐる。武科もまた弓刀石を廢して、槍砲を試すべきこと云ふまでもない。李鴻章の上奏に於ては、八股取士の法をそのままにして、別に洋務の一格を之に加へようとするに過ぎなかつたが、王韜は八股取士の法即ち時文を廢して、新なる考試の課目を設けようとしてゐる。それは洋務の附加ではなくして、考試の改變である。次に練兵は陸營・水師共に、「一に西法を以て指針とす」べきを云ひ、學校は文學・藝學に別たれてゐる。文學は經史・掌故・詞章の學であり、藝學は輿圖・格致・天算及び律例である。一は中學であり、他は西學である。律例は「服官出使の必需」と云ふ見地から、變法の一項目として加へられた。それは光緒元年の頃から、歐米の主要國に公使の派遣が問題となつてゐる當時の狀態を反映したものであらう。

* 同書同卷、「變法自強」中。

要するに王韜の目指す所は「一變」である。「やや成法を變通するものはあるにしても、小變にして大變ではなく、貌變じて眞變ではない」*「因循苟且」は殊にその嫌忌する所であつた。その限りに於て、洋務論と云ふよりは、變法論的な色彩を多分にもつてゐる。後の變法論に對して重要な影響を與へる所以であらう。ただ王韜の「變法」は、中國の治體の根本にまで及ぶものであるか否か。その點について王韜は、「所謂變はその外を變じて、その内を變ずるのではなく、その當に變すべき所のものを變じて、その變すべからざるものを變ずるのではない」** または「治國の道は固より往昔に異るを許さないものである」***と述べてゐる。然るに他面では、「西法は治の具であつて、治をなす所以のものではない。徒らに西人の舟堅炮利・器巧算精を恃んで、その上下一心・嚴尙簡便の處を師としないならば、まだ共に權るに足りない」と説くのである****馮桂芬に於ては、君民の不隔絶・名實の必符合は、その解決の道を「反求」に歸されてゐるが、王韜によれば、西洋の技藝のみならず、その精神を學ぶべきであつた。「西人はややもすれば、儒者が孔子の道を墨守して變じないことを譏るけれども、

孔子にして今日に處らしめるならば、また一變せざるを得ない」とは、同じく王韜の言葉である。***** 孔子と一變との關係は、後の變法論者がよく口にする所であるけれども、その先緒を恐らくはここに見出すことが出来る。

* 同書同卷、「答強弱論」。

** 同右。

*** 同書同卷、「變法自強」上。

**** 同書同卷、「變法自強」下。

***** 同書同卷、王韜「變法」上。

洋務論の眼目は、技藝にあつて、精神と制度にあるのではない。技藝は西洋のものであり、精神と制度は中國のものである。兩者は互に範疇を異にしてゐる。然るに變法論に於ては、技藝と制度が表裏の關係に立つのみならず、更に兩者は孔孟の教との間に、緊密な相關々係を採つてゐる。中國の古代は、直接に西洋の近代に連るのである。復古則西學であつて、その何れを缺かうとも、清末の變法論は成立し得ない。王韜の「變法」論は、中國に對立する西洋の技藝と共にその精神に注目して、中國の「一變」を圖らうとしたものである。而も「當に務むべきの急」は強兵であり、「當に變すべきものは成法である。」「治國の道は固より往昔に異るを許さないもの」であり、「孔子にして今日に處らしめるならば、また一變せざるを得ない」ものであつた。そこに認められるものは、洋務論と變法論の同時並存である。變法論的な色彩を多分にもちながら、なほ洋務論的な傾向も同時に流れてゐる所に、王韜に於ける「變法」論の性格があらうかと思はれる。而もかかる王韜の「變法」論は、當時に於て、洋務論よりも遙かに危険視されたに違ひない。王韜自身の言葉によれば、「之を大廷廣衆の中で言ふならば、必ず喪心病狂でなければ、決してかくまでにはならない」と考へらるべきものであつた*。

* 問答同卷、「變法」上。

三

かかる洋務論及び洋務・變法論的な見解の提唱される前後の時期に於て、洋務そのものは李鴻章を中心として推行された。李鴻章は同治九年（一八七〇）曾國藩の後を承けて直隸總督となり、以後二十七年の間その任に留ると共に、北洋通商大臣を兼ねて、中國外交の重責に任じた。その間中國の外交案件にして、その手を経ざるものは殆どない、と云つて差支へない。この列國との接衝が、李鴻章をして益々洋務の必要を痛感せしめたと思はれる。且つ李鴻章が直隸總督となることによつて、やがて天津が上海と並び洋務の重要な據點となつてゐる。北方に於ける洋務は、北京ではなくして、天津を中心として發展するのである。試みに、同治の後期に於ける李鴻章の洋務の主要なものを擧げるならば、天津機器局の擴充（一八七〇）、大沽に洋式砲臺設立の建議（一八七二）、上海に輪船招商局の設立（一八七二）、及び曾國藩と合同して、アメリカに留學生の派遣（一八七二）、がある。何れも海防、殊に製器造船と人才造就に關するものである。

然るに光緒の初期から中期の初めにかけては、洋務の主眼が海防にあることに變りないけれども、同治の後期に比して、更に他の要素を新に加へてゐる。即ち、ドイツに武官の派遣・福建船政學生の英佛分遣（一八七六）、鐵甲船の購入・南北洋電線の敷設・天津水師學堂の設立・鐵路安籌事宜の覆奏（一八八〇）、官督商辦の貿易公司の設立・唐胥運煤鐵路の開通（一八八二）、上海に織布局の開辦・天津武備學堂の創立（一八八五）、開平煤礦の採掘・漢河金廠の創辦（一八八七）及び北洋海軍の設立（一八八八）が之である。洋務は軍務のみならず、商務・礦務・鐵路及び電線を含み、内容的に著しく擴大されてゐる。而も李鴻章に於ける洋務は、恐らくは北洋海軍の成立にその一頂點を見出さるべきものであつて、他の諸事項はその補強的な手段として、之と關聯的に企圖された傾き

がある。少くとも天津を中心とする洋務には、かかる傾向が濃厚であると云ふことが出来る。そしてこの點から重視の度を加へてくるものが、開礦と鐵路であつた。

開礦と鐵路の重要性は、早くから外人の注目する所であつたが、中國人自身は一般に之に對して甚だ否定的な態度を採つてゐた。同治七年（一八六八）清朝の特派公使として列國に出使したバーリンゲーム（Burlingame）が中國は宣教師が續々渡來して、「あらゆる丘にあらゆる谷に、輝く十字架を樹てる」のを待たび、鐵道を敷き、鑛山を開くために、技術者を招聘しようとしてゐる、中國は既に進歩の道程に入つてゐる、と熱辯を振るつたことがあつた*之は所謂中國の進歩を説くことによつて、「邦交を固め壓迫を去る」と云ふ、その特派本來の使命を達成しようとしたものである。然しながら清朝政府並にバーリンゲームに同行の中國使節は、決してかかる見解を持してゐた譯でない。開礦は無業の遊民・礦匪を促して大亂を招き易く、鐵路は濫りに祖父の墳塋を毀ち、朝廷の勢力を以て中華孝敬の天性を減ずることとなる。中國は現に錢財を需用しない時ではないけれども、小利のために大亂の端を開くべきではなく、鐵路は公私共に便にして、利益窮りないけれども、時期を見て徐ろに圖るべきであらう。また西國の五倫は概ね朋友の道を根幹としてゐるが、それは性が然るのではなくして、習が然らしめるのであつて、習が然る所以は、教が然らしめてゐる。然しながら近く西人にして中國の書に潛心する者が多く、久しくして必ずその誤謬を覺るであらう。かかる考へ方がこの時の中國使節の旅行記、滿洲宜皇纂「初使泰西記」**に盛られてゐる見解であつた。開礦のことは同治七年八月使節がロンドンにゐるとき、鐵路のことは同年十二月パリにゐるとき、訪客との問答の一句であり、西國五倫のことは同じくパリにゐるとき感慨である。

* H・B・モース、H・F・マクネーア著、邦譯「極東國際關係史」上、三四三頁。

＊ ＊ 小方壺齋輿地叢鈔第十一帙第二冊所收。

當時中國にゐる外人の間にも、開礦・鐵路の利益と必要を説くものが多かつた。そしてその多きを加へるにつれて、清朝政府並に一般の讀書人には、それが外人のおせつかいであり、外人の内地開發の利權要求と關聯あるものと見做された。外國の實際を見聞した中國使節にして、なほ開礦と鐵路の利よりも害が多く、その時期でないことを語るのである。バーリンゲーム使節團の特派は、かかる種類の外人の壓迫と要求を拒否しようとする所にも、その一目的があつた。バーリンゲームの所謂中國の進歩は、清朝政府は勿論、一般中國人の聲ではなかつたのである。

然しながら所謂洋務派の人々の間には、開礦の要が比較的認められてゐたやうに思はれる。その先驅的な議論が既に觸れた如く、樹茶と並び開礦をば裕國の補助的な手段とする形を以て、咸豐の末年馮桂芬によつて提出されてゐる。礦税は民を病ましめ、礦徒は民を擾し、且つ風水に害ありとして、開礦に疑問をもつものがあるけれども、風水渺茫の説は經國者の口にすべきことではなく、開礦はその税を利するのではなくして、經費の外總て民に與へようとするのであり、また統御に人を得るならば、礦徒の憂はない。外國は開礦を以て常政とし、洋書には中國の地に遺利多きを云ふものがある。若し中國自ら開かなければ、外國が之を開き、坐してその裨載して去るのを見るであらう ＊ 之が馮桂芬の説く所であつて、外國との關聯に於て開礦に注目した最初の議論である。

＊ 校別廬抗議卷上、「籌國用議」。

同治年間には一般の拒否的な空氣に壓せられて、開礦論も表面化することはなかつたけれども、同治の末・光緒の初に至り、新に開礦が洋務の一環として、論議の對象となつてゐる。王韜は「財用を裕かにする」ための一項目として、「開礦鑄銀」を掲げ、薛福成は海防密議十條の中に、「開礦宜籌也」の一項を加へて、開礦をば「籌

餉の一助」たらしめようとした。また李鴻章のある上奏中の一句によれば、「外國から鋼鐵等の材料を購運する費を省く」と共に、「鎗砲機器の仿造を期待できる」と云ふ點に、開礦の效用を掛けてゐる。洋務が製器造船を主軸とする限り、開礦の重要性はこの點に於て高まるであらう。開礦はその原料を直接に供給するからである。とに角光緒元年（一八七五）の前後に於て、開礦は新なる積極性を以て論議されるのであつて、同時にこの頃からその試辨が實際に始まらうとしてゐる。その端をなすものが、光緒元年李鴻章による磁州煤鐵の採掘であつた。之は「運道の艱難と機器の不全」とのために中止されたけれども、光緒三年（一八七七）には開平に局を設けて「先づ力を煤礦に専らにし、それが成效するならば、必ず鍊鐵を續鑄」すべきことが意圖された。ここに開礦は實際的な試辨の裏付けを得て、もはや見誤り得ないその方向を決定するのである。光緒十三年（一八八七）には、開平礦務局は「實に輪船招商・機器製造の各局と相表裏するに足る」と上奏されてゐる。以て李鴻章の洋務に占める開礦の重要性を窺ふことが出来る。

* 李文忠公奏議卷二四、同治十三年十一月初二日「籌議海防摺」附議覆各口清單。

** 光緒政要卷十三、光緒十三年二月「直隸總督李鴻章奏辦開平煤礦」。

*** 同 右

鐵路に對する關心を表面化せしめる契機となつてゐるものは、吳淞鐵路の問題であらうと思はれる。上海に於ける英米商人の間には、早くから鐵路建設の欲求がもたれてゐた。同治二年（一八六三）英米商館二十七行の聯名を以てなされた上海・蘇州間に鐵路建設の請願、及び同四年（一八六五）上海・吳淞間の鐵路建設を目的とする吳淞道路公司（The Woosun Road Co.）の設立は、その具體的な現はれである。その何れも失敗に歸して後に、イギリス系の怡和洋行（Jardine, Matheson & Co. Ltd.）を中心としてロンドンに組織された鐵路公司により、

再び上海・吳淞間の鐵路建設が企圖された。それは車路修築の名目の下に同治十三年（一八七四）工を起し、光緒二年（一八七六）上海・江灣間の鐵路を開通せしめてゐる。然しながら中國側にとつては、鐵路は利權の疑惑を伴ひ易く、且つ官民の空氣は一般に未知の鐵路に對して、甚だ拒否的であつた。鐵路を一種の魔術と考へるものがあり、官の使喚によつて、暴徒の江灣の終點に對する襲撃も起つてゐる。既に鐵路建設の途上に於て、當局者の間には買収の交渉が進められてゐたのであるが、而も開通の翌三年（一八七七）中國側に買収と同時に、鐵路は取り毀された。官民一般の鐵路に對する認識の程度を察することが出来る。

ただ之と同時に注意される點は、吳淞鐵路の問題を契機として、中國自身の手によつて、鐵路を建設しようとする云ふ議論も一部には起きてゐることである。王韜の如く、今日の時勢に於て、中國自ら鐵路を造ることは不可能のことで、外人の手に俟つ外にない。中國自ら造らうとしても、成法に拘泥するものの妨害があつて行ひ得ない、と説く論者もあつた*之は香港に於ける知識人の代表的な一見解と思はれるが、之に對して李鴻章中心の洋務派の間に、自主的な鐵路建設の要求が起つてゐる。ここに鐵路の消極的な拒否は、洋務派の人々に於て、その積極的な肯定に轉換するのである。既に同治の末年、李鴻章は海防の見地から鐵路の利を要路に陳言してゐるが**吳淞鐵路の撤壞以後には、その傘下から公然と鐵路の問題を論ずるものが現はれた。鐵路の利便とその弊害の謂はれなきを説く薛福成の「創開中國鐵路議」***及び洋債を借りて鐵路を開かうとする馬建忠の「鐵道論」・「借債以開鐵道説」****は、その代表的なものである。

* 皇朝藝文編卷三五、王韜「建鐵路」。吳淞鐵路開通直後の作？

** 清史稿交通志一。

*** 庸庵文編卷二、光緒四年の作。

**** 適可齋記言卷一、共に光緒五年の作。

薛福成は商務・轉運及び調兵の三點から、鐵路の利便を述べてゐる。そして鐵路がもし開けるならば、引敵入室の恐れがあり、小民の生計は奪はれ、當道の塚墓は徙され、禾稼は灼かれる、と云ふ當時の一般的な考へ方に對して、逐次之を辯駁してゐる。それは鐵路が敵の用をなすのではなくして、敵を禦する所以であり、鐵路公司の設立は民の生計を廣め、當道の塚墓はやや迂廻して之を避ければよく、且つ鐵路の幅は廣きも丈餘、狭きは數尺で、禾稼を灼く患はない、と云ふ風のものであつた。吳淞鐵路が買収と同時に撤壞される當時の情勢に於ては、かかる議論がなほ多分の啓蒙性をもつのである。また外人がしきりに鐵路の利を云ふのは、之まで利權の開發と關聯があるように疑はれ、そこに鐵路に對する受容の一障礙があつた。然るに薛福成は、「西洋人は良法の行はれないのを惜しみ、中國に代り鐵路を行ふことを唱へようとするのであつて、中國が自ら先きに舉動するならば、萬國公法によつて、人の自主の權を犯すものはない」と述べてゐる。問題は自主的な鐵路の建設であり、そのためには先づ「一二ヶ所に試辦して」、「中國の耳目を新に」しようとするのである。

薛福成が鐵路創開の根據を示さうとしたのに對して、主にその籌款の法を説いたのが、馬建忠である。財源を官または民に求めることは、京餉・協餉に迫られ、風氣未だ開けない今日、困難であつて、洋債を借りるのも止むを得ないと云ふのが、その立論であつた。然しながら洋債を借りて、「中國の鐵道を却つて洋人の利藪とし」、「居間把持の弊」を生じてはならない。そのためには、英佛の都市に赴き、その官私銀行と商權して、自主的に利息と金額を定めること、借債と入股を區別すること、及び償還すべき最初の五六年間の利息を併せ借りること、略々五十年にしてその本息を清算すること、借券には番號を記して、姓名を記さないこと、の如き諸箇條を實行すべきであるとされてゐる。即ち、「西法に倣ふて」、借債の法を講じようとするものであつた。馬建忠は光緒三年（一八七七）李鴻章がフランスに留學せしめた人であつて、「鐵道論」・「借債以開鐵道說」は共に歸國後間のな

い作と考へられる。

薛福成・馬建忠の説について、光緒六年（一八八〇）には、前福建巡撫劉銘傳の鐵路籌造の上疏、及びそれに對する李鴻章の覆奏がなされてゐる。* 劉銘傳は先づ清江浦から都北京に至る鐵路を興辦して、李鴻章が上海・天津間に設けようとする電線と表裏せしめようしてゐる。目的は「用兵」であり、財源はしばらく洋商に借らうとするものである。李鴻章の覆奏は、覆奏の形式を以て更に「鐵路の興辦・自強の力圖」を請ふたもので、薛福成の代作である。* それは先きの「創開中國鐵路議」の論旨を殆どそのままに採り入れ、且つ借債を止むを得ない辦法と認めてゐる。ただそのために中國の自主權が犯されてはならないのであつて、一切の招工の給料と鐵路の經理事宜を中國自ら行ひ、洋人の附股を許さず、且つ借款は後日入るべき鐵路の利を以て分還することとし、海關を擔保としてはならないことが、借債の前提とされてゐる。なほ李鴻章の覆奏に於て注意される點は、鐵路と礦務の關係を強調して、結語としてゐることである。その云ふ所によれば、「中國が自ら鐵路を造るには、必ず自ら煤鐵を開かねばならない」。従つて「若し鐵路に開辦の資があるならば、その内から十分の一を割いて、機器洋法を仿用し、煤鐵を開採すべき」であつた。蓋し「礦務は鐵路によつて益々盛となり。鐵路は礦務によつて益々修まる」からである。

* 皇朝道咸同光奏議卷十三、劉銘傳「請開鐵路以圖自強疏」。

* * 李肅毅伯奏議卷六、光緒六年十二月初一日「妥議鐵路事宜摺」。庸庵文續編卷上、「代李伯相議請試辦鐵路疏」。

劉銘傳の上疏とそれを支持する李鴻章の覆奏がなされたとき、「都中の議論は洶々として大敵の將に至らんとするが如く」であつて、鐵路の議は「遂に沙汰止みになつた」とは、光緒十五年（一八八九）薛福成の述懐であつた。* ただこの間に於て、開平礦務局管下の唐山炭田から胥各莊に至る約二十支里の運煤鐵路が造られてゐる。唐

山は李鴻章がバーネット (R. R. Burnett) 及びモールスウォース (J. M. Molesworth) にその開採を委ねたもので、開採の目的は、輪船招商局と編成中の北洋海軍に對し、「他に依存せざる炭源を供給しよう」とするにあつた。^{**} 運煤鐵路は光緒六年 (一八八〇) 運煤の勞を省かうとする外人技師の要請により、驢馬軌道を用ふることを條件として、李鴻章が朝廷の認可を得たものであるが、翌七年 (一八八一) には、私かに舊廢の蒸汽機罐を以て作られた小機關車に代へることとなつた。光緒十二年 (一八八六) の頃には、それは更に南六十支里の閻莊にまで延びてゐる。運煤鐵路は礦務用の特殊な用途のものであるにしても、之が間もなく天津・山海關を結ぶ鐵路の據點となる所に、重要な意味をもつのである。

* 庸庵文續編卷上、前揭文附。

** H. Springer, The Chinese Railway System, p. 2.

鐵路に對する爲政者の關心が呼び覺まされようとするのは、他の洋務の諸項と同じく、光緒十一年 (一八八五) 安南戰爭の和約以後のことである。それはこの戰爭の敗北を境として、軍備の充實が要路によつて漸くその必要を痛感されてきたからに外ならない。この氣運を背景として、「天津等の處に鐵路を試辨して、調兵運械に便ならしめよう」と云ふ總理衙門の上疏が提出されるのであつて、以後鐵路は看過し難い現實の問題となつてゐる。そしてこの上疏の背後に李鴻章のあることは、云ふを俟たない。この上疏は唐山・閻莊間の鐵路を南は天津に、北は山海關にまで延長しようとするものであつた。ただ經費の點から、先きに閻莊・大沽間、次いで大沽・天津間、更に開平以北山海關の鐵路を漸を逐ひ接造しようとしてゐる。光緒十四年 (一八八八) 閻莊・大沽間及び大沽・天津間の鐵路が竣工したのは、この上疏の具體的な效果である。之によつて、唐山の石炭は鐵路を通じ直接に大沽に送られることとなつた。李鴻章の意圖はここにその實現を見るのである。鐵路は開礦との相關性を以て、

軍務殊に海防・北洋海軍と緊密に聯結してゐる。そこに李鴻章に於ける洋務の特徴的な性格がある。

* 皇朝道咸同光奏議卷十三、總理王大臣「天津等處試辦鐵路以便調兵運械疏」。

四

李鴻章に於ける洋務が、北洋海軍の成立にその一頂點を見出さうとする頃、曾紀澤によつて中國先睡後醒論が提唱された。之は光緒十三年（一八八七）二月香港の德臣西字報（Daily Press）に英文を以て掲載され、次でロンドンの四季報（Quarterly Review）に轉載されたもので、英文の漢譯も顏詠經の口譯・袁竹一の筆迹の形で世に出てゐる。中國先睡後醒論は、中國が「垂斃には非ずして、酣睡に似た状態にあつたに過ぎず」、現に「清醒してをり」、「將滅の國と見做し得ない」ことを強調したものである。そして清醒の證據として挙げられるものが、李鴻章の「中國軍務の整頓」であつた。庚申の役（一八六〇）は「如何にして軍制を整飾し、如何にして砲臺を堅固にし、如何にして器械を精利にするかを教へた」。そのために圓明園及びその所藏品を失つたけれども、「軍務の整頓」と云ふ一見識を長じた點に、重要な意義があると考へられた。軍務の整頓と云ふ一見識は、即ち中國の清醒である。従つて中國が現になさうとしてゐる海防の興辦・水軍陸軍の創立は、次第に推廣して、決して疎懈してはならない。鐵路の起工その他の富國の法もまた必需のものではあるけれども、後日を俟つて圖るべきで、しばらく舍いて問はないと云ふ。鐵路を強兵ではなくして富國の範疇に入れてゐる點に差異はあるにしても、富國よりも強兵を重視するのであり、要するに洋務運動の代辦的な見解である。

* 皇朝善英文編卷一、及び「曾論書後」に附載されてゐる。

そして曾紀澤が眼前に最も整頓しなければならぬこととして強調するものは、専ら「國外の事」・「邦交の一事」に歸せられてゐる。1) 外國寄居の華民を善處し、2) 中國の藩國統屬の權を申明し、3) 和約を重修して、堂々たる

中國の國體に合せしめることである。具體的には、逆待されてゐる外國寄居の華民に留意して、外國の寛待を要望すること、朝鮮・西藏・新疆の如き外藩の自主を認めず、保護を加へて他國の侵蝕を被らしめないこと、及び租界の如き中國地主の權を奪ふ條項は、換約の期に撤廢せしめることを、その内容としてゐる。曾紀澤にとつて、軍務は中國覺醒の象徴であり、邦交は覺醒した中國の當務であつた。「居室は先づ垣墉を繕ひ、門鍵を固くし、穿窬の恐れなからしめねばならない。然る後に内務を清理すべきである」。「國是を籌り、紀綱を整へる」ためには、先づ「國勢の強化」が必要であつて、國勢の強化は即ち軍務と邦交に外ならなかつた。

曾紀澤は英露に出使して、光緒七年（一八八一）ロシアと伊犁の收回を議決し、同十年（一八八四）イギリスと洋藥の稅釐併徵を議定した。殊に伊犁の收回は、「殆ど中國が洋務を辨じて以來なき所」と激賞されるものである。この著名な外交家にして邦交の一事を強調することは、正にその當を得たものでなければならぬ。然るに所謂中國の清醒とその論據については、同じく光緒十三年（一八八七）嚴しい批判が香港から提出されてゐる。それが即ち何啓・胡禮垣の會論書後である。*

* 清史列傳卷五八、曾紀澤傳。

** 何啓・胡禮垣「新政眞詮」所收。

會論書後によれば、曾紀澤の所謂醒は夢に過ぎない。「睡中の夢・夢中の夢」と異る所がないのであつて、その所謂醒の證據として挙げられるものは、「夢裡の張拳」・「夢中の伸脚のみ」と酷評されてゐる。醒と夢とは本末前後の關係に立つてゐる。本根に徹することと、徒らに枝葉を事とすることである。曾紀澤に於ては、屋宇は先づ垣墉を繕ひ、扁鍵を整へ、壁宇の堅固を俟つて、家規を條理すべきであり、治國もまた先づ國勢の盛強・藩籬の鞏固・外侮の既絶を俟つて、國政を内修すべきであつた。然るに會論書後に於ては、正にその逆の關係に立つ

てゐる。必ず内修が先きで、然る後に外攘すべきである。建國と建屋を問はず、基址を永固ならしめてから、大廈が出来上る。國の基址は何か。それは「公平なる政令」に外ならない。「公は無私の謂で、平は無偏の謂である。公は明で、明ならば、庶民の心を心として、君民に二心なく、平は順で、順ならば、庶民の事を事として、君民に二事がない」。即ち、「公平なる政令」を基として、君民を一體、上下を一心の關係に置くことが、治國の要諦となるのである。然しながらそれには先づ人を得なければならぬ。破格と重祿によつて人を得て、捐納・科甲・軍功の如き「中國の弊政」を改めることが、急務と考へられた。得人及び捐納・科甲・軍功の如き弊政は、同治の初年以來論者の屢々口にすることであつて、會論書後に始る譯でない。異る所は意味の持たせ方である。之までの洋務派の人々に於ては、概ね強兵が先決であり、かかる弊政の改良も強兵策の便宜的な手段として、之と關聯的に論及されるのが常であつた。然るに會論書後に於ては、外攘から内修へ、強兵から内政へ、重心は逆轉してゐる。かかる弊政の改革そのものが、何よりも急務となつてゐるのである。

會論書後は光緒十三年（一八八七）の作であるが、この前後に洋務論の一轉期を劃することが出来る。王韜の「洋務」上下も光緒十三・四年の作であつて、從來の洋務的・變法的な性格から、洋務論的なものが拭ひ去られてゐる觀がある。即ち、兵士を練り、邊防を整へ、火器を講じ、舟艦を製することは、その外なるもの、所謂末である。内なるものに至つては、我が中國の政治よりしなければならぬ。所謂本である。その大なるものは、ただ官常を肅し、士習を端し、風俗を厚くするのみと云ひ、また時文を廢するのは、西法・洋務を習ふがためのみではなく、本根のかかる所は、孝弟・忠信・禮義・廉恥である、と述べてゐる。恰も内外本末の關係が逆になるのである。また光緒十四年（一八八八）には、「成法を變じ、下情を通じ、左右審慎しむ」の三項目を掲げる、康有爲の上今上皇帝第一書が提出されてゐる。***清末變法論の頂點に立つべき、康有爲の變法論と何啓・胡禮垣の新政

論が、素朴な形ではあるにしても、共に光緒十三・四年に於てその萌芽を見せるのである。

* 皇朝藝文編卷五五所收。

** 南海先生四上書記所收。

かかる内治重視の傾向と並び、光緒十年代の前半期に於て注目さるべきことは、西學の根據を中國の古書に求める傾向が起つてくることである。西學を中學に附會する考へ方は、既に同治年間にその徴候を認められる。同治六年（一八六七）同文館に算學館を附設しようとするときの、「西法の借根（代數學）は中術の天元に基くもので、西人の中にも目して東來の法とするものがある」と云ふ恭親王の上疏、及び算學の學習は「西法を借りて中法を印證するに過ぎない」と云ふ上諭が之である。算學館の附設は、李鴻章の江南機器製造局・左宗棠の福建船政廠と呼應して、北京に於ても自強の道を講じようとするものに外ならなかつた。そしてそのとき、天文算法はもと中國のものであり、一物として知らないのは儒家の恥であつて、製造は工匠の事として儒者は之をなすを屑しとしないけれども、周禮攷工記は悉く大工車工の事である、と云ふ説明の仕方が採られたのである。李鴻章の洋務に思想的な根據を與へた論者は、「反求」と「夷に待つあるもの」・「自治」と「自強」、即ち中學と西學を互に區別する觀點に立つてゐた。然るに最も保守的にして而も列國の使臣が駐劄する北京に於ては、よし技藝の面に限られてはゐるにしても、逆に西學を中學に附會することによつて、西學への道を開かうとしたのである。北京の官場は中學に對立するものとしての西學の採用を、到底容認し得なかつたに違ひない。而も恭親王の如き列國との協調派は、何等かの形に於て舊套脱皮の方圖に出でざるを得なかつた。そこに設立されたのが同文館であり、算學館であつて、同時に西學の中學への附會的な説明が試みられたのである。それにも拘はらず、算學館の附設に對して強い駁論が起きたことは、既に述べた如くである。

然るに光緒の初葉には、進歩的な知識人によつて、西學と古典との關係が新たなる問題となつてゐる。かかる種類のものとして、駐英公使曾紀澤とその妹婿陳松生との談話の一節を擧げることが出来る。即ち、西人の政教は周禮と相合意するものが多い、老子は周の柱下の史であつて、その後西下して流沙に到つたが、周の典章法度にもそのとき記錄に従ひ共に西下するものがあつた、ただ何れも確證なきに苦しむのみ、と云ふ陳松生の談に對して、曾紀澤は「その説甚だ新にして喜ぶべきもの」と述べてゐる。且つヨーロッパは昔皆野人であつて、その文學政術は大抵アジア洲から漸を逐ひ西來したものである。故に風俗人物が我が中華の上古の世と相近い。西人の一切の局面は中國に皆あつたのであつて、稀れではない。中國の上古にも殆どまた無數の機器があつたが、財貨が漸く缺乏したので、人に愉愔多く機括も傳を失つた。今日の西洋を見て上古の中華を知ることが出来、今日の中華を見てまた後世の西洋を知ることが出来る、と云ふ曾紀澤自身の感想を附記してゐる。^{*}之は光緒五年（一八七九）ロンドンでの對話であるが、西人の政教に周禮と符合するものがあることを認めたことは、即ち前者の優秀性を承認したことに外ならない。蓋し中國人の理想は周代にあり、それとの關聯に於て、西人の政教が理解されてゐるからである。

^{*} 「出使英法日記」、光緒五年二月二十三日の條。小方壺齋輿地叢鈔十一帙の四。

光緒四年（一八七八）イギリスへの出航の途上に於ては、「先聖昔賢の論述・六經典籍の記載は、以て宇宙萬物の理または道を窮めるに足るけれども、それは必ずしも古今萬物の器と名を備へたものではない」と云ひ、東西の間に存する飲食衣飾の異・政事言語風俗の不同は、堯舜禹湯文武周孔の見聞しなかつた所で、それに通ずるために、各國の言語文字を考究することが、儒者の宜しく従事すべきことである、と曾紀澤は記してゐる。^{*}之は中國の古典が形而上のことには備はつてゐるけれども、形而下のことには不備の點があり、中國と異なるの故を以て、

西洋の文物に對し徒らに「虚矯夸大の辭をなして、自ら文飾する」の弊を指摘したものであつた。正に洋務派の代表的な見解である。然るに西洋に於ける體驗は、短日月にしてその政教を周禮に附會せしめると共に、西洋の機器をも中國の古代にあつたものと想定せしめた。中國と質的に異なる西洋の文物は、却つて中國の古代にその親近性を認められたのである。それは西洋の文物に對する價值評價が、それだけ重みを加へたことを意味するのであつて、側らかかる評價の仕方そのものに儒家的な傳統の奥深い根強さを感じられる。

* 同書、光緒四年九月二十一日の條。之は汪芝房撰「文法舉隅」に對する曾紀澤の序文の一句である。

西人の政教に對する關心は光緒の初葉に於て、曾紀澤の外にも特志の士には抱かれてゐた。光緒四年（一八七八）曾紀澤がイギリスへの途次上海に寄港したとき、張煥綸が彼に六ヶ條の陳言を行つてゐる。その一ヶ條は「機械の利を云ふのみであるけれども、西國制勝の根本は富強にあるのではない。その君民相視・上下一體の關係は實に儒者の言に暗合するものがあるのであつて、その政教に必ず斐然として見るべきものがあるに違ひない。かかる考へ方がこの一ヶ條の背景となつてゐるのである。また初代駐英公使郭崇勳も西人の政教に注目した先驅的な一人と云ふことが出来る。光緒二年（一八七六）イギリスへの赴任の航海中に於て、郭崇勳はイギリス艦船の交歡の狀に「彬々然たる禮讓の行を見、彼の國の富強の基がかりそめでない」ことを知つた。西洋は貿易を立國の本としてゐるが、その商政の經理は整々と嚴肅に、條理は秩然としてゐる。そこに富強を致す所以の根本があると考へ、アデン近くのペリム島をイギリスがフランスから奪取したことは、イギリス人が上下一心となつて國の利を謀ることを思ひ、その沛然として興るべき所以に想到したのである。之は即ち「西洋は立國二千年、政教修明にして具に本末がある」と云ふ、西洋の富強の背後にあるものに對する反省に外ならないであらう。

* 同書、光緒四年十月十一日の條。六ヶ條は、1) イギリスと好を結んでロシアの患を弭めよ、2) 誠を開き公を布いて形蹟を泥ぼせ、3) 暇時には西儒を延見して諮訪に備へよ、4) 機器の利鈍、價値の貴賤は時に隨ひ采訪して欺偽を免れよ、5) 機器の外に西國の政教の書を選譯して採擇に備へよ、6) イギリスと禁煙の策を妥商して中國に福あらしめよ、である。

かかる反省からは、中國と列國との關係についても、之までとは異なる解釋が施されざるを得ない。西洋は遼金が一時に崛起して忽ちに盛衰したのとは、情形が絶えて異なるのであつて、その中國に至るのはただ通商を務めるのみと云ひ、或は近年英佛露米の諸大國が角立して互に雄を稱する有様は、春秋列國に較べて殆ど遠く之に勝つてをり、萬國公法を創つて互に信義を先きにし、殊に邦交の誼を重んじてゐる。その兵を中國に構へるにもなほ展轉理に據り、爭辨重を持して、然る後に發するものである、と郭崇燾は述べてゐる。目指す所は、かかる西洋諸國を前にして、「高談闊論して虛憍自大の時ではない」ことを戒しめるにあつた。凡そ氣矜をなすものは妄人であつて、與に國事を云ふに足りないとも論ずるのである。そしてこの氣矜と關聯して非難されるものが、宋明の儒者であつた。宋明の諸儒は、安民保國を心とする古人の意に反して、害をなすこと烈しきものであり、夷狄を大忌とし、和を大辱とするのは、實に南宋より始るとして、退けられてゐる*

* 郭崇燾「使西紀程」、光緒二年十月二十日、十一月十二日、十三日、十八日、十二月初六日の諸條、小方壺齋輿地叢鈔十一帙の二。

然しながら西人の政教の優秀さを認めることは、當時にあつては勿論異例のことであつた。先きに郭筠仙侍郎（崇燾）は、常に西洋の國政民風之美を歎美して、清議の士の排斥する所となるに至つた。余もまたややその言の過當なるを訝つてゐたが、この度歐洲に來游してパリからロンドンに至り、始めて侍郎の説の當れるを信じたとは、光緒十六年（一八九〇）歐洲諸國へ出使した蔣福成の言葉である* 光緒の初葉は、政教は中國のもの、利器は

西洋のものと云ふ考へ方が、一部人士によつて提唱され、漸くにして利器の導入が部分的に首肯されかけようとする時期であつた。かかる時に更に飛躍して西人の政教を云々するが如きは、所謂清議の士の到底許容し得ない所であつたに違ひない。薛福成の如き洋務論者にして、なほその説の過當を怪しんだのである。西人の政教に周禮と符合するものが多いと云ふ、「甚だ新にして喜ぶべき」一見解は、中國の本土よりも西洋に於ける進歩的な中國人の間に、先づ起り得べき性質のものであつたらうかと思はれる。

* 薛福成「出使英法義耳四國日記」、光緒十六年三月十三日の條。小方壺齋輿地叢鈔十一帙の七。

然るに光緒十年代の前半期に於ては、西人の利器と中國の古書との關係が先づ新たな關心事となり、それに附隨して、西人の政教も論議の對象に置かれてくる。そして後半期に入るにつれて、西洋の機器よりもその政教と中國の古典との關係に、重心が移されてくる。かかることは單に極めて特殊な個人が孤抱する見解の域を越えて、次第に西學に留意するものの共通な通念にならうとしてゐる。換言すれば、一個の風潮を形成しようとするのである。かかる種類の早期のものとして、張自牧の瀛海論及び王之春の瀛海卮言を擧げることが出来る。何れも光緒十年（一八八四）頃の作である。瀛海論は*西學の採用をば中國の古書との關聯に於て、積極的に肯定する立場を採つてゐる。従つて、西學を新奇として、中學を棄てて之に従ふのは、笑ふべきことであり、西學を非類として之を退けるのも、恥づべきこととされた。「今日天下の人は競ふて西學を談するけれども、思ふにそれは西學ではないのである」。天文曆算は蓋天宣夜の術に基き、西洋の幾何は借根の法を譯したもので、東來の法とされてゐる。化學・重學・光學・汽學・電氣及び地動説の如き、何れも中國に由來するものとして、中國の古書にその淵源を求めようとしてゐる。例へば、墨子に化は易ることゝに徴する、蛙の鵲となるが如しと云ひ、五行の合ふのは水火土相離くが如しとある、之は化學の祖であり、亢倉子に蛻地を水と云ひ、蛻水を氣と云ふのは、

汽學の祖であり、また經に地は神氣を載せ、神氣は風霆、風霆は流形にして、百物露生すと云ふのは、電氣の祖であるの如き類であつた。古書の片言隻句に西學の濫觴と覺ばしきものを探り、かくて西學は「もと中國載籍の外に出づるを得ず」、「その緒餘を推衍した」に過ぎないことを云はうとしたのである。注意すべきことは、かかる附會的な説明が當時に於ては、西學に對して道を開くと云ふ積極的な意味をもつことである。西學は外國の學ではなくして、もとは中國の學に出づるもの、西學にして西學に非るものであつた。従つて儒者は西學を知らないことをば、却つて恥とすべきであると考へられてゐる。同様の附會的な説明が、文字及び宗教についても試みられてゐる。西洋の文字は佉盧に基き、宗教は墨子の本旨を桑門天方の説、即ち佛教と回教によつて縁飾したものと云ふ所見が之である。之はキリスト教の起原を墨子の兼愛説に結び付けようとするものに外ならない。

* 小方壺齋輿地叢鈔十一帙の六。

所謂西學及び文字についてのかかる説明の仕方は、王之春の瀛海卮言にもそのままに認めることが出来る。瀛海卮言には*西學については瀛海論と論旨のみならず、文章にも殆ど全く同一のものが多く、また文字については、古の文字の作者はもと三人であつて、縦書きは蒼頡、左より右への横書きは佉盧、右より左への横書きは沮誦であり、西洋の文字は「實に佉盧に基く」と、やや詳しい説明を付してゐる。兩書は共に光緒十年頃の作であつて、何れの著述年次が先きであるかは明かにし難いけれども、少くとも西學と文字に關する限り、兩書の間に密接な關係があることは、疑ないと思はれる。何れか一方が他方に據つたのに違ひない。そして瀛海卮言はかかる附會的な説明を「廣學校」の章に載せ、洋務に關する人材育成の論據としたのである。之までの洋務論が西學を中學に對立するもの、質的に異なるものと見做すのに對して、張自牧及び王之春は、西學を却つて中學に包攝せしめた。それは洋務論の延長であると共に、その新たな發展である。

* 前書十一帙の八。内容は慣約議・聯與國・廣學校・精鑛術・固邊圉・修船政・興礦利・防漏稅・強兵力・練民團・禁販奴・編教民・論鴉片的十三項目よりなる。

洋務の重點は云ふまでもなく機器であるが、瀛海論には西洋に於ける機器の發達について一個の所見を述べてゐる。商業と機器の關係が之であつて、結論としては、機器の製造を官辦から民營に委ねやうするのである。その説く所によれば、西洋は商を國の本となし、一切の大政に商人が關與し得るのであつて、「なほ春秋の遺風がある」と云ふ。そして電線・汽車・汽船はもと通商のために設けられ、兵船・火器は商人を保護するためのものであり、且つ耕織煤鐵は何れも機器によつてゐる。従つて富商大賈は己に利あるがために、競ふて機器の營造に務める。之に反して中國に於ては、官と民は懸絶して通じない、汽船・機器の模造も皆官が之に當り、民はそのことに與らないから、勞して效を期し難いと云ふのである。

然るに瀛海論はかくて西洋に於ける機器の發達とその中國に於ける困難を反省する立場を採りながら、一面ではなほ機器そのものに對して強い疑惑をもつてゐる。即ち、耕織煤鐵の事を擧げて人力に代へるに機器を以てするならば、天下の民は日に奢侈に趨かざるを得ない。また民の生業は機器のために奪はれ、相聚つて亂をなさざるを得ないと云ふ見解之である。而も現實には機器の製造は當務のことであり、官辦では成績を擧げ得ない。そこに舟車耕織煤鐵の諸務は一切民の自便を許すがよく、かくすることによつて、差し當り急に西人の利を分取することが出來ると共に、百數十年を経れば、利は薄くなつて機器は廢されることになるであらう。且つ機器の利を嗜むものは海濱各省の商民であつて、腹地の各省にこの向來未有的風氣を開いて、他日無窮の憂を貽す必要はないと云ふ、消極的な折衷説が提出されてくる。西洋は商業立國・機器は官辦よりも民營・及び機器は大亂の本の如き諸概念は、同治の末から光緒の初にかけて、洋務派とその反對派の側から既に唱へられたものであつた。

瀛海論はこの互に相反撥する諸概念をば、洋務の立場から妥協せしめようと圖つたのである。それは西學に注目しながら、なほ從來の保守的な傾向に拘束される一知識人の姿である。

なほ瀛海論には之までの洋務論とは異なる一傾向をも同時に認めることが出来る。洋務派の人々が目指す所は、殊に海防の充實であつたが、瀛海論は海防を寧ろ輕視する傾きをもつてゐる。中國の沿海及び内地の諸港に於て外人は租借地を設けて積財聚居すること既に二十餘年に亘り、輕々しく發難しようとしないうこと、各國は中國に入つて互に牽制の勢があり、一國が獨り逞しくするのを許し得ないこと、及び外人の志は謀利にあつて、土地人民を覬覦する心があるのではないこと、この三點から海防の急務でないことを云はうとするのである。それは「盡く邊防を弛めよと云ふのではない」けれども、「政治を修明し紀綱を整飾する」ことをば、先づ肝要と考へるものであつた。軍備よりも内政に重きを置かうとするのであつて、自ら洋務に對する新たな批判に導くべき契機を、その内に藏してゐる。

張自牧の蠡測卮言は、恐らくは瀛海論よりもやや後に出でて、之に直接する作品である。蠡測卮言に於ては、西學と中國の古書との關係は更に延びて、「機器は三皇の世に始る」とされ、三代以前には天官に世々專家があり、九數は六藝に列なり、儒者は童子から之を習つてゐた、然るに士大夫の心思才力は皆その大なるもの、その遠きもの、即ち性命と倫常に向けられたので、一切の技藝に遍及する暇がなく、疇人の子弟はその藝を挾んで西域に遊ぶこととなつた、且つ疇人の子弟が西游して以來、中國の法器は亡びたが、三千年を経て東來の法が再び中國に還つたのであつて、「之は確然として疑ふべくもない」ことと考へられてゐる。蠡測卮言は西學が中國に出づると云ふ事例の列舉に止まらず、その根據として、天文算數を業とする疇人の子弟の西游を想定したのである。之は老子と周の典章法度の西往を以て、西人の政教に周禮と合意のものが多いことを説明しようとした曾紀澤等

の趣向と、同巧異曲であらう。ただ曾紀澤等がその「確證なきに苦し」んだのに反して、張自牧に於ては「疑ふべくもない」確心となつてゐる。そしてかかる確心から導かれるものは、「西學の本源を知つて、その長ずる所を採用する」ことであつた。かくすることによつて、「製器利用に於て皆益正する所があり、以て中國の大を見るに足る」からである。

* 同書十一帙の八。

瀛海論には、西學を知らないことを恥とする考へ方と機器を亂の本とする考へ方が、ある妥協點を見出しながら同時に含まれてゐた。一は西學に對して積極的に道を開き、他は消極的に之を阻まうとするものである。然るに蠡測卮言に於ては、その消極的な一面が殆ど影を潜めた。機器の中國の古に淵源することが、確心を以て語られると共に、西學の長所を採用することは、即ち「中國の大を見るに足る」所以となつたのである。かかる機器とその根底にある西學に對する關心が高まる反面に於て、蠡測卮言ではまた、西洋の儀禮が新たな考慮の對象となつてゐる。西洋では君主・民主を問はず、君と臣民・長官と屬吏は、相見ゆるときに儀禮が簡易で、上下の間に不通の氣がなく、不宜の情がない、故に心志齊一で、號令嚴明である、ドイツ・イギリス等の國が獨り雄を八洲に稱するのは、ただその民氣通じて、人心齊しきためであつて、その富強の根底は他ある譯でない、と説かれるのである。

この「民氣通じて人心齊し」と云ふ考へ方は、光緒の初葉に於ける王韜の「上下一心・嚴尙簡便」、及び張煥綸の「君民相視・上下一體の關係」と、その性質を同じくするものであり、更に發展するならば、光緒十三年（二八八七）何啓・胡禮垣の「公平なる政令」に歸着すべきものであらう。機器を古書に附會せしめることによつて、洋務に積極的な根據を與へようとした張自牧に、海防の輕視と内政の重視、「民氣通じて人心齊し」と云ふ

傾向が同時に現はれることは、洋務論の新たな轉換を示唆するものでなければならぬ。ただ張自牧に於ては、西洋の儀禮に對して積極的な關心が示されるけれども、その議會政治に對しては、新たな考慮は拂はれながらも、未だ消極的な態度を脱することが出来なかつた。「西洋各國には皆議政院があつて、民の公舉を聽し、議紳は時に民情を官に達する」「春秋の時に列國は嘗つて國人を朝して事を議せしめてゐるが、西洋にはなほ古意の存するものがある」と述べながら、「而も郷里の偽善家は不得要領で、同流合汙の士及び能く道に違ふて百姓の譽を求めるものが、儼然として顯官に就いてゐる」と貶するのである。變法論の成立過程は、一面に於て、西洋の議會政治に對する關心の度合に比例するものである。張自牧が西洋の儀禮に注目しながら、その議會政治を肯定し得なかつた所に、變法論への胚種を藏しつつ、而もその前段階に止ることを、認めざるを得ない。

光緒十年代の前半期は、洋務が次第に上昇を辿る時期である。開礦と鐵路を兩翼とする李鴻章の北洋海軍に對して、武漢では張之洞の洋務工作が有力に推進されようとしてくる。「馬江の敗後（光緒十年）、議者は漸く西法の悉くは拒み得ないことを知り、洋務を談するものも深く恥としないやうになつたが、大臣は未だ解せず、惡むものもなほ多い」とは、梁啓超の言葉であり*「今（光緒十三・四年）は人々皆洋務を知るに近い。凡そ洋務に屬する人員は、例として優缺を得、高官に拔擢されることが出来、常に上流の器重する所となつて、側席して諮問に應ずる有様である」とは、王韜の言葉である**一は主として保守的な北京の官場に注目し、他は進歩的な上海から展望したものである。その間に輕重の差はあるけれども、何れも新風氣の開發を肯定することには變りない。

* 梁啓超「戊戌政變記」卷一。

** 王韜「洋務」上、皇朝藝文文編卷五五。

かかる時期に於て洋務論そのものからは、既に述べた如く、内政と軍備を本末の關係に置く方向と、機器を古

書に附會せしめる方向が、強く現はれてくる。一は機器中心の洋務否定の立場であり、他はかかる種類の洋務に對する積極的な肯定の立場である。而も後者の立場は、機器中心の洋務に積極的な根據を與へながら、なほ海防よりも内政を重く見ると云ふ、反洋務的な傾向をも同時にもつてゐる。これ等は洋務論の自己分裂であり、その新たなる發展である。洋務論は、西學と中學を互に對立するものと考へ、西洋の機器を導入することによつて、海防の充實を圖らうとする所に、その要點があつた。來るべき時期に於ては、この洋務論から分れ出た二方向、内政重視と古代附會と云ふ兩概念が漸を逐ふて主軸となり、その合體を廻つて展開さるべきである。西洋の機器と中國の古書との關係は更に延びて、西洋の制度と中國の古典との關係が、論議の對象に置かれてくる。西學の内容は次第に機器から制度に轉じ、古代への反省は、孔孟の教と西學との間に緊密な聯關性を帶はしめる。そこに成立するのが、清末變法論である。嘗つて西人の政教に周禮と合意のものが多くことを注目した曾紀澤が、轉落して「中國軍務の整頓」に、中國清醒の根據を求めた頃、光緒十三年（一八八七）の前後に於て、内政と古典と西學の如き變法論の諸要素となるべきものが、或は互に獨立に、或は互に絡み合つて、胎動しつつあつたのである。